

まり、種々の舞伎・音楽を雨からせ、種々の花を雨からせ、種々の香を雨からせ、種々の衣を雨からせ、虚空中いつぱいに、大雨のふりそそぐように、仏と仏の子らに供養し、供養の雨をからしおわると、上から下へおり、虚空中で第二電光明大宝蓮華王種々宝山上に坐った。

ラーヴァナの行為を神通といわずに変化ということ、供養の品に楽器が多いことともに注目すべきであらう。ラーヴァナのついた席が第二であるのは、第一の席に如来が坐るからであらう。

34

尔時如来。見其坐已。発於微笑。曉楞伽王問二種法。時。楞伽王白仏言。世尊。此二種法。我已曾問。過去諸仏正遍知。彼仏世尊。已為我說。世尊。我今現在。依名字章句。亦問如来。如来畢竟為我說。世尊。応化化仏。説此二法。非根本如来。世尊。根本如来。修集三昧樂境界者。不説心識外諸境外。善哉世尊。如来自身。於一切法。而得自在。惟願世尊正遍知。説此二法。一切仏子。及我己身。亦願欲聞。

そのとき、如来は、かれが坐るのを見、微笑してみせ、ランカー王が二種を問うのに耳をかたむけた。で、ランカー王は仏に問うていう。世尊よ。この二種法を、わたしはすでにがつて、過去の諸仏正遍知に問いました。あの仏世尊は、すでにわたしのために説かれました。わたしはいまの現在、言語・文字・章句によつて、また如来に問いました。如来は結局わたしのために、お説きくださるでしょう。世尊よ。応化仏も化仏も、この二法を説かれますが、根本如来ではありません。世尊よ、根本如来は三昧樂境界を修集するかたで、心識外の諸境界を説かれませんか。そうでず世尊、如来自身は一切法において、自在を得ておられます。どうか、世尊正遍知よ、この二法をお説きください。一切の仏の子とおよびわたし自身もまた聞きたいと願っています。

ラーヴァナの問いは、きよに核心に入る。二種法は眞実か否か、二種法とは、識と色、知るものと知られるもの、これらを分別する立場である。差別観の根本を問うているのである。過去仏はすでにラーヴァナに対して答えている。それが眞実ならば、ラーヴァナが夜叉王として、現在仏に同じ問いを發

する必要はないはずである。だが、げんにラーヴァナは夜叉王として問うている。そのこと自体が、過去仏が根本仏でなかったことを示している。応化仏・化仏・衆生の領解の度合に依じて化現する仏にすぎない。仏のギリギリの本心を明かしてください、というのが、このときのラーヴァナの問いである。さきに31で、仏は聖者大慧に、この十頭羅刹は未来においてこの二法を問うであらう、といった。それなら、差別は、現在ののみならず、未来にものこされ、羅刹はやはり羅刹として差別され、差別の根の国から、差別のいわれのないことを問いつづけよ、ということか。それならば、現在の仏も応化仏・化仏にすぎず、根本仏とはいえないではないか。

35

尔時。世尊。知而即告楞伽王言。楞伽王。汝問此二法。尔時。夜叉王。受菩薩種種金冠璎珞金莊嚴具。而作是言。如來常說。法尚應捨。何況非法。世尊。云何言二法捨。世尊。何者是法。何者非法。世尊。捨法云何有二。以墮分別相中。虛妄分別是有無法。無大有大。世尊。阿梨耶識知名識相。所有體相。如虛空中有毛輪住。不淨尽智所知境界。世尊。法若如是。云何而捨。そのとき、世尊は、知って、すぐランカー王に告げていう。ランカー王よ、あなたはこの二法をお問いなさい。そのとき、夜叉王は、さらに種々の金冠・璎珞・金莊嚴具をつけて、こういった。如來は常にお説きになる。法でさえ捨てるべきもの、まして非法は、と。世尊よ、どうして二法の捨棄をいわれるのですか。世尊よ、何が法で、何が非法ですか。世尊よ、捨つべき法に、どうして二と立てて、分別相に墮ちこむようなことをするのですか。虚妄分別こそ有・無の法であり、有の実体、無の実体でしよう。世尊よ、アーラヤ識が名と識の相を知るのだが、そのあるという体と相とは、虚空中の毛の輪のようなもの。不淨の智の知る対象です。世尊よ、こんな法を、どうして捨てるのですか。

世尊が問うとき、ラーヴァナは夜叉王となり、さらに金冠等をつける。そこにはやはり「世尊」の影がたどられているのであらう。名と識の相と誤したところは、おちつかめぬ気するが、アーラヤ識が対象とする心的なもののあらわれ方というほどの意であらう。不淨尽智所知境界の尽は一本にはなく知を

仏告楞伽王。楞伽王。汝不見瓶等無常敗壞之法。毛道凡夫分別境界差別之相。楞伽王。何故不如是取。有法非法差別之相。依毛道凡夫分別心有。非聖證智以為可見。楞伽王。且置瓶等種種相事。毛道凡夫心謂為有。非謂聖人以為有法。楞伽王。譬如一大火燒宮殿園林草木。見種種火光明色炎各各差別。依種種薪草木長短。分別見有勝負之相。此中何故不如知有法非法差別之相。楞伽王。非但大火依一相統身中見有種種諸相差別。楞伽王。如一種子一相統生牙莖二枝葉華果樹林種種異相。如是内外所生諸法。無明及行陰界入等一切諸法。三界所生。皆有差別現。衆形相言諸去來勝智異相。一相境界而取於相。見下中上勝相染淨善不善相。楞伽王。非但種種法中見差別相。覺如實道者內證行中。亦有見於種種異相。何況法非法。無分別種種差別相。楞伽王。有法非法種種差別相。仏はランカー王に吉げた。ランカー王よ。あなたに、瓶などのような無常敗壞の存在を見ないか。幼稚な凡夫は境界差別の相を分別する。ランカー王よ。なぜこのようにとらないか。法と非法の差別の相があるのは、幼稚な凡夫の分別心によってあるのだと、聖なる證智が見うるものだとするのではないと。ランカー王よ。かりに瓶などの種々相のことをと、てみよう。幼稚な凡夫は心にそれがあると思いが、聖人はそれを存在する法と見しない。ランカー王よ。たとえば一つの火炎が宮殿・園林・草木を焼くと、種々の火の光明色炎におのおの差別が見えるようなものだ。種々の薪や草木の長短によって、分別して勝り劣りの相があるとみる。このなかにどうしてこのように法と非法の差別の相があることを知らないだろうか。ランカー王よ。火炎だけがその一持統中に種々の諸相の差別をあらわすのではない。ランカー王よ。一つの種子の一持統中に芽・莖・枝・葉・花・樹・林などの種々の異相を生ずるようなものである。このように内外に生れる諸法、無明および行・陰・界・入などの一切の諸法で、三界に生れるものは、みな差別があつて現れる。形相・言語・去來・勝智の異相をねがえ、一相の境界でも相をとり、下中上・勝相・染淨・善不善の相をあらわす。ランカー王よ。種々の法中にだけ差別の相をあらわすのではない。如實の道を覺る者の内證の行中にも種種の異相のあらわれることがある。まして法と非法とに分別の種々の差別相がなからうか。

ランカ王よ。法と非法の種々の差別相があるのだ。

この一節は難解だ。ことに、非聖證智以為可見・非謂聖人以為有法。と前であつて、後に、覺如実道者内證行中亦有見於種種異相。というのが矛盾と考えられる。

もつとも、前の聖または聖人は仏で、後の覺如実道者を菩薩と考えるなら、そのちがひ目に種々の異相が入りこむのだ、ともいへなくはない。

いまひとつ、聖人と覺如実道者とは同じだとする。ただその内證行中にも種々の異相はあらわれるが、それを実在の差別とみないのが真実だ、というのであるかもしれない。

世尊が「世尊」となつて眞実をまげろ危機の指摘から始まつた楞伽經は、その根柢に、仏はつねに仏でありうるか、という問いをもっている。この問いに答えないかぎり、それは仏の答文とはなりえない。仏もまた瓶などと同じく諸行無常のうちにあり、たえず差別觀と戰つていないかぎり、差別觀の中に転落する。仏になればそこには差別觀との戰いはないのだというような、のんきなユートピアを、仏の世界に見ようとするな、ということこそ、ここでくりかえしているのではないだろうか。

37 楞伽王・何者為法。所謂一切外道声聞緣覺毛道凡夫分別之見。從因実物以為根本生種種法。如畏等

法・応捨應離・算取於相。而生分別・見自心法。計以為実、楞伽王。無瓶実法、而毛道凡夫・虚妄分別・法本無相。如実知觀、名捨諸法。

ランカー王よ、いかなるものが法であらうか。いわゆる一切の外道・声聞・緣覺・幼稚な凡夫の分別の見解では、物を実体とすることが根本になつていてそこから種々の法が生じる。このような法は捨てるべきであり離れるべきである。相にとらわれて分別を生じたり、自分の心がくり出した法を見て実体だと判断したりするな。ランカー王よ、瓶の実体はないのに、幼稚な凡夫は、虚妄に分別する。法はもと無相なのだ。如実に知り觀することこそ、諸法を捨てることと名づけるのだ。

この前後でいう法と非法は Dharma と Adharma の訳語なのであるが Dharma のものが多義で、

それを適切な日本語に訳すことは、わたしの手にあまる。たぶん現象の基体というほどの意味で使っているであろう。平川彰「諸法無我の『法』」を讀むと、仏教学者の間でも「法」についての定義が確定しているわけではないらしい。けれども、ともかく八法はたもつものでありつつ、しかも無常であり、無我であるVという何含經の主張は、楞伽經でもうけつがれていて、その法の無常・無我を見わすれて、いる外道等を批判するのが、この前後の教節であろう。A一般に変化には連続的な性格と断絶的な性格とが見られるが、しかし連続と断絶との混合ということは不可能なことである。変化・無常は論理によつては把握できない世界である。原始仏教では、これを「如実に正しい智慧 *Samma-paṇi*」をもつて見る」と示している。連続や断絶を知るのには、判断であり、論理であるが、無常を悟るのは如実知見 *Abhiññā* と呼ばれるものである。これはまた無分別智 *Aniṭṭha-dharmā* とも呼ばれるVという平川のことは、このでよい注釈となるだろう。ただ楞伽經では、同じく智慧といつても智により智慧の方にアクセントがおかれているらしいこと、サキにのべたとおりである。

38 楞伽王、何等為非法。所謂無有身相。唯自心滅妄想分別。而諸凡夫見實法非法。菩薩如實見如是捨非法。復次楞伽王、何者復為非法。所謂兔馬驢駝角石女兒等。無身無相。而毛道凡夫。取以為無為。世間義說於名字非取相。如假瓶等法可捨。智者不取如是虛妄分別。兔角等名字法。亦是可捨。是故捨法及非法。楞伽王、汝今問我。法及非法云我捨。我已說竟。

ランカー王よ、どのようなものが非法であらうか。いわゆる実体や相のありけしめもので、ただみずからの心のみが妄想分別を滅すのだが、もしもその凡夫はそこに実法と非法とを見、菩薩は如実にこのようなものを見て非法を捨てる。またつぎにランカー王よ、なにがまた非法であらうか。いわゆるウサギ馬ろばラクダの角とが生まず女の子などで、実体もなく相もない。だが幼稚な凡夫は有為だ無為だといっている。世間でことばや文字にはいうが相をもたないものだ。あの瓶などの法が捨てるべきであるように、智者はこのような虚妄の分別はとらない。ウサギの角などのようなことばの上でだけの法もまた捨てるべきである。このゆえに、法と非法とを捨てるのだ。ランカー

王よ。あなたはいまわたしに法と非法とはなぜ捨てるのかと問い、わたしは説きおわった。

前後ちぐはぐだが、相の説明を辞典から引いておこう。八相・ラクシャナ lakṣaṇa ものの相状・様相や特質・特性などを用いて、自性（体）とも同義に用いられるが、体（本体）・用（はたらき）に対し、見られるもののすがたをさし、またものそれ自体である性に対し、その現象的相状をいう。V

39

楞伽王。汝言。我於過去无正遍知已問此法。彼諸如來已為我說。楞伽王。汝言過去者即分別相。未來現在分別亦尔。我說真如法体是如來者亦是分別。如分別色為實際。為證實智樂。修行無相智慧。是故莫分別。如來為智身智体。心中莫分別。意中莫取我人命等。云何不分別。意識中取種種境界。如色形相。如是莫取。莫分別可分別。

ランカー王よ。あなたはいう。わたしは過去の无正遍知にすでにこの法を問い、あのころもろの如來にすでにわたしのために説かれた。と。ランカー王よ。あなたのいう過去なるものが分別相なのだ。未來・現在も分別でまたあるのだ。わたしが、真如法体が如來なるものだ、と説いたのもまた分別だ。物質を分別して實際とするようなものだ。実智の樂を証明するために、無相の智慧を修行する。だから分別しない、如來は智身智体だ。心中で分別せず、意中に我・人・命などを取らない。どんなに分別しないのか。意識中に種々の境界を取って、物縁の形相のようにする。そのようには取らないのだ。分別と分別されるものがない。

是故莫分別如來為智身智体。唐訳や鈴木訳によつて右のように訳したが、それでは、如來を智身智体とする分別がそこにあるようである。むしろ、人だから、如來は智身智体だと分別するな、と訳すべきではないか、と思う。疑いを存して、さらにかんがえたい。

40

復次楞伽王。譬如壁上画種種相。一切衆生亦復如是。楞伽王。一切衆生猶如草木。無業無行。楞伽王。一切法非法。無聞無説。楞伽王。一切世間法皆如幻。而諸外道凡夫不知。楞伽王。若能如是見

如実見者。名為正見。若異見者。名為邪見。若分別者。名為取二。楞伽王。譬如鏡中像自見像。譬如水中影自見影。如月燈光在屋室中影自見影。如空中響聲自出聲取以為聲。若如是取法与非法。皆是虚妄妄想分別。是故不知法及非法。增長虚妄。不得寂滅。寂滅者名為一心。一心者名為如來藏。入自内身智慧境界。得無生法忍三昧。

また次にランカー王よ。たとえは壁上の画の種々相のように。一切衆生もまた。そのようである。ランカー王よ。一切衆生は草木のようなものだ。業もなく行もない。ランカー王よ。一切の法と非法は。聞くこともなく説くこともない。ランカー王よ。一切の世間の法はみな幻のようだ。だがもしもろの外道や凡夫は知らない。ランカー王よ。もしこのように見、如実に見ることができれば。名づけて正見とする。もし異った見方をするなら名づけて邪見とする。もし分別するなら名づけて二を取る。とする。ランカー王よ。たとえは。鏡中の像がみずから像を見るようなものである。たとえは水中の影がみずから影を見るようなものである。空中のこだまがみずから声を出してその声にとらわれるようなものである。もしこのように法と非法とを取るならば。みなこれは虚妄の妄想分別である。このゆえに。法と非法とを知らず。虚妄を增長し。寂滅を得ない。寂滅を名づけて一心とする。一心を名づけて入自内身智慧境界に入り。無生法忍三昧を得る。如來藏とす。

これで請仏品はおわる。そうして、ここで、ランカーに入る。とけ、自内身智慧境界に入ることであつたとあがされる。自内身智慧境界に入ることと差別の根の因に入ることが、二つのことではない一心なのだ。

ここで請仏品はおわり、問答品第二がはじまり、宋訳の一切仏語心品カーの一のあの発端につづく部分から、唐訳の集一切法品等二の一がはじまる。だが、その新しい章のはじめの一組の散文と韻文は、請仏品のフィナーレに当る部分であろうと、わたしは推察する。それを二節にわけて次に訳出する。

41 尔時。聖者大慈菩薩。与諸一切大慈菩薩。俱遊一切諸仏国土。承仏神力。從坐而起。更整衣服。合掌恭敬。以偈讚仏。

そのとき、聖者大慧菩薩と、もろもろの一切の大慧菩薩は、ともに一切の諸仏国土に遊び、仏神力をうけて、坐より立ち、さらに衣服をととねえ、合掌し敬礼し、偈で仏をたたえた。

分別の世界、差別の世界では、聖者大慧と夜叉王ラーヴァナは二であつた。すでに一心に観ずる世界で、その二を引きずらねばならぬ理由はない。夜叉王はもはや存在しない。夜叉も存在しない。いすれもみな大慧菩薩である。その一心の世界でなお聖者大慧と大慧とがあるのは、強いてことばに宣説するための方便であらう。同じ俳優が、舞台の上で乞食になり大名になつてみせるようなものである。

41

仏慧大悲観 世間離生滅 猶如虚空花 有無不可得 仏慧大悲観 一切法如幻 遠離心意識 有無不可得 仏慧大悲観 世間猶如夢 遠離於断常 有無不可得 仏慧大悲観 煩惱障智障 二無我清淨 有無不可得 仏不入不滅 涅槃亦不住 離覺所覺法 有無二俱離 若如是観仏 寂靜離生滅 彼人今後世 離垢無染取

仏慧が大悲もて観すれば、世間は生滅を離れ、虚空の花のように、有・無をしることばできぬ。仏慧が大悲もて観すれば、一切の法は幻のようで、心意識から遠く離れ、有・無をしることばできぬ。仏慧が大悲もて観すれば、世間は夢のようで、断絶と持続を遠く離れ、有・無をしることばできぬ。仏慧が大悲もて観すれば、煩惱の障り智の障り、二つながら無我清淨で、有・無をしることばできぬ。仏は入らず滅せず、涅槃にもまたとどまらぬ、さとりものとさとりを離れるものとを離れ、有・無の二をもともに離れる。もしこのように仏を観すれば、寂靜で生滅を離れる。その人は今も後世にも垢を離れてけがれに染まぬ。

ここでも仏慧とあつて仏智といわぬところがおもしろいが、まあ、そんなことは、どうでもよい。大慧はすでに仏慧となつてゐるのだが、仏のすがたをとらないところが大悲なので、そのらの理論は、これからあとの、わたしが注疏とよぶ諸品に散説される。

楞伽経はここでもどこかに尊を開じる。いや、ランカーの舞台には舞みたいなものなく、空の碧と木

々の縁が映じ風がこだまをいびかせるだけだったかもしれない。

1973.12.1-1974.2.11

菩提流支伝と李賀小伝

李商隱の「李賀小伝」は、李賀の詩をもっともよく理解した詩人批評家の書いた詩人として貴重なのだが、そのなかに、近代人には信じがたい事件が、事実として記されていることで、よりいっそう有名である。李賀を口にする人なら知らぬ者はない文章で、いまさら引くのも気がひけるが、話の都合上、写さぬわけにはいかぬ。「四部叢刊」に収める旧抄本によって、問題の部分だけ訓読文でかかげる。

長吉まさに死せんとするとき、忽ち昼に一緋衣の人を見る。赤蚪に駕し、一版書を持てり。太古の篆あるいは霹靂の石文のごときものにして、いう。まさに長吉を召すべし。と。長吉ついに読むあたわず。たちまち榻より下り、叩頭していう。阿弥陀仏を呼ぶ。老いかつ病めり。賀は去ることを願わず。と。緋衣の人笑いていわく。帝、白玉楼を成せり。たちどころに君を召して記をつくらしむ。天上はやや樂し。苦しからざるなり。と。長吉ひとり泣く。あたりの人ごとくこれを見る。しばらくして長吉の氣絶す。長に居りしところの窓中、勃々として烟氣あり。行車嚙管の声を聞く。太夫人、急に人の哭するを止め、これを待つこと五斗の黍を炊ぐがときほどの時にして、長吉ついに死せり。

唐代の人ならとにかく、今日のわれわれは、とうていこれを事実と信じることは困難である。そこでこれを譬喩とみ、象徴とみ、批評の形式とみ、あるいは断末魔の妄想とみ、衆団幻視とみるなど、さまざまな解釈がおこなわれている。

ところで、この話には、先行する説話がある。寮閭にしてこれを指摘した人を知らない。

唐の西明寺の沙門狀道宣の撰した『統高僧伝』卷一の菩提流支伝に付載する那摩提の伝がそれである。『大正新脩大藏經』第五十卷史伝部二におさめる。

時にまた中天竺の僧勒那摩提あり。魏にて宝意という。博瞻の富、理事兼通す、一億偈を誦し、偈に三十二字あり。尤も禪法に明らかに、意は遊化に存す。正始五年（386）はじめて洛邑にいたる。十地宝積論など大部二十四卷を訳す。……初め、宝意沙門、神理標異にして、魏詞を領牒し、ひとえに隅隙を尽す。帝つねに華嚴經を講ぜしむ。披釈開悟し、精義つねに発す。一日、高座に正处するに、忽ち、笏を持ち名を執る者あり。形、大官のごとし。いつ。天帝の命を奉じ、來つて法師に講う。華嚴經を講ぜよ、と意いやく。今この法帝はなおいまだ停止せず。經文を記るを待って、まきに來命に従うべし。然りと雖も法事は資するところ、独りにては建つる能わず。都講・香大・維那・梵唄、みなまたこれを須たん。請いて定めしむべし。と、使者、ただちに請うところの見講の諸僧にゆく。既にして法事まさに了らんとす。また前の使を見る。いつ。天帝の命を奉じ、ことさらに來下して迎う、と。意すなわち笑いを含み、熙怡として家に告げ辭決し、奄然として法座に卒す。都講等の僧もまた同時に殞りぬ。魏境のひと聞見して嗟美せざるなし。

李賀は泣き、宝意は笑う。そのような違いは主人公が、詩人と僧であれば当然だが、天帝が人間の異才を、使者をやつて迎へさせるという共通性をもつこの両話に、連絡がないと考へるならば、むしろその理由を求めのるのに困難するであらう。

では、李商隱が、かつて僧伝を読んで、この一節にひかれ、李賀の伝を書くときに、それを變形して賀の臨終の事件を捏造したのであらうか。

いかに文士が羅文するとしても、その文によつておのれの官界での位置にもかかわる当時の世俗から考へて、まずありえぬことである。

それならやはり、かれのいうように賀の臨終譚は、賀の姉なる人の話にもとづくもので、姉の話は、賀の生前にたえず口にした奇異な話が混合變形したものと考へられ、その奇異な話の有力なものに、勒

那摩提の伝があったのだ、と推測できないだろうか。

では李賀はなぜ勒那摩提の伝を読んだのか。おそらくかれは、勒那摩提に最初から興味をもったのではなく、かれの愛読する楞伽經十卷本の訳者菩提流支の事蹟を求めて「統高僧伝」をしもとぎ、菩提流支の伝中に見出した勒那摩提の伝に、菩提流支に対する以上の魅惑を覚えたのではないか。菩提流支とはいえ、菩提流支の伝そのものはなけだ奇異である。その奇異を伝えるためにはその長大を厭って節略するわけにはいかぬ気がする。

菩提流支。魏にて道希という。北天竺の人なり。遍く三藏に通じ、妙に總持に入る。志は弘法にあり、広く視聴に流り、遂に道を狭み、尙征き、遠く葱左に在り、魏の永平の初めをもつて、東夏に來遊す。宣武皇帝、勅を下し、引きて所せ、殷華を供擬す。これを永寧大寺に処き、四事（衣服・飲食・臥具・医薬）もつて七百の梵僧に給し、勅して流支をもつて訳經の元匠となすなり。

その寺は、もと孝明皇帝の熙平元年、靈太后胡氏の立つるところ、宮前の閭闔門南の御道の東にあり、中に九層の浮圖あり、木を架してこれをつくり、みな高さ九十余丈。上に金刹あり、また高さ十丈、地を出すること十尺、台を去る百里、すでに遙かにこれを見る。初めて基を營む日、掘りて黃泉に至り、金像三十二軀を獲たり。太后おもえらく、嘉瑞にして法を奉信するの徴なりと。一こをもつて節制環奇、世の華美を窮む。刹表には金の宝瓶を置き、二十五斛を容る。承露金盤は一十一重、鉄鎖角張、盤と鎖上にみな金鐸あり、一石の磑のごとし。九級の諸角にみな大鐸をかけ、上下およそ一百三十枚あり、その塔は四面九間、六窓三戸、みな朱漆の扉扇、もろもろの金鈴を垂れ、層に五千四百枚あり、また金鐸、鋪首を施し、仏事精妙、土木の工を殫し、鐵柱金鋪、心目を驚駭す。高風永夜、鈴鐸和鳴し、鏗鏘の音、十余里に聞えり。北に正殿あり、形を太極に擬す。中のもろもろの像設、金玉珠繡、作工巧奇、当世に冠絶す。僧房周り接して千有余間、台觀星のごと羅って、参差として閑出す。朱紫を彫飾し、縹緗に丹青をもつてし、枯柏梅松、異草叢集し、院牆周匝して、みな椽瓦を施す。正南に三門樓間いて三道三重、地を去ること二百余尺、狀は天門のごとく、赫奕華麗、門を挟んで四力士四師子を列ね、飾るに金玉をもつてし、莊嚴煥爛。東西の兩門、例みなかくのごとし。異なるべきところのものは、櫺は兩重、北門の

通道は、ただ路にして置く、その四門外は、樹うるに青槐をもつてし、亘るに渌水をもつてす、京師の行旅、多くその下に庇ひ、路は飛塵を断つて、滄雲の潤によらず、清風月涼を送つて、あに合歡の発を藉らんや。すなわち中書舍人常景に詔して、寺碑を制せしむ、

景は、河内の人、敏学博通、名を海内に知らる、太和十九年^{四二五}、高祖、擢んで修律博士となし、詔ありて条格を刊定せしむ、永く通式となる、景すなわち今古を商榷し、科賦を条貫しめ、すなわち魏律二十篇これなり、中書舍人・領門侍郎・秘書監・幽州刺史を歴官し、居室儉儉、事、農家のごとし、ただ終史の車に盈つるあり、著すところの文集百余篇、給事中封睦伯、序を序り、世に行わる、

寺すでに初めて成る、明帝と太后、共に浮図に登り、宮中を視るに掌内のごとし、下は雲雨に臨み、上天は清朗、宮内の事を見るをもつての故に、人に禁じてこれに登るをゆるさず、西夏東華より諸国に遊歴する者みないわく、かくのごとき塔廟は、閻浮(ヘイランド)にも無きところと、孝昌二年^{五三六}、大風屋を撲い樹を拔ぎ、利上の宝瓶は風に随つて墮ちて地に入ること丈余、また工人に命じて更に新しきものを安ず、永熙三年^{五三四}二月、天の震うところとなる、帝、凌雲台に登つて火を望み、南陽王の宝炬録尚書長孫稚をして、羽林一千を擢いて来救せしむ、この時におけるや、雷雨晦冥、霰雪交注す、第八級中、平坦に火起る、二道人あり、焚煖に忍びず火に投じて死す、その焰相繞して経ること三月に余り、地に入りし剎柱はすなわち周年に至るもなお煙氣あり、その年五月、人あり東萊郡より至りていう、浮図の酒中にある光明儼然たるを見ると、同じく親しもの一にあらず、俄にして雲霧乱起して、その所在を失う、七月に至り、平陽王、侍中斛斯椿の扶むところとなり、西長安に奔る、十月に至つて洛京は遼都に遷る、

先時、流支、勅を奉じ、創めて十地(経)を翻す、宣武皇帝、章を命じ、一日親對筆受じ、しかる後沙門僧辯等に付し、論文を訖尽す、仏法隆盛、英俊蔚然、相從つて伝授し、孜孜如たり、帝また清信士李廓に勅し、衆經録を撰せしむ、廓は学玄素に通じ、經論を条貫し、もと標擬あり、故にその録にいう、三蔵流支、洛より鄴に及び、ここに天平^{五三四-五三六}に至る二十余年、およそ出だすところの經は三十九部、一百二十七卷、すなわち、仏名・楞伽・法集・深密等の經、勝思惟・大宝積・法華・涅槃等の論これなり、並びに沙門僧朗・道温と侍中崔光等筆受す、つづさに唐貞観内典録に列す、廓またいう、三蔵法師

流支、房内の經論梵本万策あるべし。翻するところの新文の筆受藁本、一間屋に満つ。しかれどもその慧解は勒那と相亞ぐ。しかして神悟腹敏。洞く方言を善くし。かねて咒術に工なるは、則ち抗衡するなり。かつて井口に坐し、澡罐内空なり。弟子いまだ来たらず。人の水を汲むなし。流支すなわち柳枝をとり、いささか井中にくるい。ひそかに誦呪を加う。わすかに数遍にして、泉水上涌し、平らなること井欄に及ぶ。すなわち鉢をもつて酌み、これを用いて盥流す。傍の僧つぶさに見てその神を測るなし。みなともに大聖人と嘉歎す。流支いわく、妄りに褒賞するなかれ、これすなわち術法のみ。外国は共に行えども、このがにては習いとせず。おもいて聖となすのみ。世網を惑わさんことを懼れ、遂に秘して宣べず。……また北天竺の僧仏陀扇多あり。魏にて覺定という。正光元年五三二より元象二年五五九にいたり、洛陽白馬寺と鄴都金華寺において金剛・上味等の經部を説出す。翻經の日に當つて、洛陽内殿において、流支、本を伝え、余僧参助す。その後、三徳すなわち流言にしたがい、各おの師より習いしを伝え、相詢訪せず。帝は弘法の盛をもつて、曲傾を略叙し、三処に勅し、各おの翻じ説けばすなわち参校す。その間、隱没して、互いに致を同じくせざるあり、文旨の時に異を兼ねて綴るあり。後人これを合して共に通部となす。宝唱等の録に見ゆ。……また熙平元年五五〇、南天竺波羅城婆羅門、姓は瞿曇氏、名は般若流支、魏にて習帝という。元年より興和五三二の末にいたるまで、鄴城において正法念・聖善住・迦諱・唯識等の經論およそ一十八部八十五卷を訳し、沙門曇林僧昉等筆受す。当時、沙門菩提流支と般若流支と、前後して經を出だし、しかして衆録の伝写するに、おおむね輕略して各おの上の字を去り、ただ流支ということ多し。しかれどもこれ何流支なるかを知らず、今にいたつて群録目録の相渉つて、詳かに定むることを得がたし。

中略したところは前引の勒那摩提の伝文がはいるところである。

さて、菩提流支のこの伝を読んで、その半ば以上の文字が、永寧寺に費やされていることを知って、驚きあきれた。その輪奐の美と、その盛衰の荒唐は、術語を忌む律師道宣がこの伝の撰者であることを思えば、虚構ではなく、たしかに資料によつた、事實に近いものなのであるう。そうして、菩提流支がただそこに居を与えられたためだけに、この大量の文字ががれの伝に費やされたとは考えにくく、この